

保冷カーテンを付けて使ってもらった。子どもたちに教えていると、反応が速いため楽しく教える事ができた。

震災後のこうした環境学習を通じて、推進員としての役割をある程度は果たせたとの思いはある。気仙沼と一緒に活動してきた人たちの中には仮設住宅で暮らしている人もいたので、その方々の役に立ちたいという思いも強かった。逆に仮設住宅での暮らしの工夫を教えていただいた事もあった。どんな状況の中でも、日々「ネットワーク」をつくってきたことが活かされるのだと感じている。常日頃から心と心が繋がっている関係を持続するためには、努力もしなくてはならないと思う。

震災を振り返って

気仙沼に住み、海と共に育ってきた。それを考えると、海と共に生きてきたし、生かされてきたことを震災で思い知らされた。気仙沼の基幹産業は

漁業なので、自然の恵みに感謝しながら享受しようという考えがある。

一概に津波が悪いとは言い切れないとも思う。海の恩恵を受ける漁業を営む人の家の天井は高く、そこには必ず神棚がある。自然と共生していく運命（さだめ）を受け入れたことの現れだ。先祖は「自然」というものは対立するものではなく、共生していくものだということを忘れないで生きてきた。正月には、神棚の近くにすめ、魚、酒を吊るし、海への畏敬の念を持ち続けてきた。自分たちの中で生活の一部のひとつが海だった。自分に取り組んできた環境活動と、先祖代々が行ってきたことは矛盾したことではないと実感している。何も無くなり変わり果てた町を見ると絶望感はあるが、今まで住んできた町への思いや地域で育まれた知恵があることで、あるがままを受けとめる事ができるのだと思う。気仙沼で生きてきたことを誇りに思い、そのDNAを感じながら復興再建を目指していきたい。

個人

シャッターを切った理由。 ただの記録ではなく、記憶を後世に。

気仙沼市

山内 宏泰 個人

取材日 2012.08.08

リアス・アーク美術館学芸員美術家として個展、グループ展など多数開催している。また舞台美術家、舞台衣装家として多数の舞台に参加している。専門は美術教育、造形理論、現代美術、地域文化教育、津波文化史研究と普及だ。東日本大震災大津波で自宅を流失した。震災後は各地で「津波の災害史、文化史」等に関する講演を行なう。著書「砂の城」近代文芸社

津波の伝承を考える

生まれも育ちも石巻。1978年の宮城県沖地震を経験していて、当時小学1年生だったが、津波注意報か津波警報が発令されたのを覚えている。高台の鉄筋アパートの4階で暮らしていた。幼かったので津波というのが何なのか理解することができなかったが、それでも子ども心に「避難する準備だけはしないとイケない」と感じ、自分の宝物をリュックサックに詰めて、服を着たまま、懐中電灯の灯りをじっと見つめて一晩を過ごした事を覚えている。この地震で初めて津波を意識させられた。

海の近くに住んでいれば「海洋文化」があるわけで、当然、津波被害の歴史がある地域では、それは海洋文化の中に組み込まれなくてはいけない。昭和8年の昭和三陸大津波、昭和35年のチリ地震津波から、東日本大震災が起きるまでにいった

い何をしていたのか。日本人は大事な何かを忘れてしまったように思う。戦後、日本が大きく変わって津波という意識が人々の心の中から消えてしまったためではないだろうか。

3年で「津波文化」を継承していく仕組みをつくらなければ、また忘れられることになる。例えば、三陸沿岸部の小学校や中学校では、総合学習の中で必ず津波の学習をする時間を設け、地域で年に1度は集まって津波の勉強会を開催する。避難訓練を年中のお祭り行事として津波の脅威を継承していくのもいいだろう。けれども地域の生活文化が崩壊している現代社会では、どう残していこうかと考えた時、難しい部分が多い。

3月11日 14時46分

美術館1階の取蔵庫で作業中に大きな揺れが起きた。自分にとっては、未曾有、想定外という思

いはなかった。想定もしていたし、過去にも何度も起きていたので、大きな揺れが起きた時、「ああ来たな」と率直に思った。2日前に起きた地震を「やばい揺れ」だと感じていた。だから、知人や美術館を訪れたお客さんにも、備蓄などの準備をしたほうがいいと告げていた矢先のことだった。大きな揺れが起きて、しばらくしてまた大きな揺れが起こり、停電した。「今回はひどい」と思っていると、再び揺れ、計3回の大きな揺れが起きた。3回目の揺れの時は、この世の終わりが来たのかとも感じた。建物はまるでゼリーのように、波を打つように揺れていた。

慌ててパニックに陥ることもなく、「遂に来た」という思いだけがかった。

揺れが少し落ち着いたように感じたので、作業中だった作品の安全を確保し、14時55分くらいに収蔵庫から出たのを覚えている。

他の部屋の状況も確認したかったが、停電のために暗く、とても確認できる状況ではなかった。15時過ぎに屋外に出た。その時には、市内のいたるところから多くの人々が車で避難していた。あちらこちらから防災避難放送が流れているのだが、なかなか聞きとれない。避難した住民から「6mの津波が来る」と聞いた。15時20分が過ぎた頃、「津波が見えるらしい」とざわめく声が耳に入ったので、美術館の屋上から周囲を眺めた。町を見ると、家屋が流れ、破壊され、白煙が舞い上がっていた。本来見えるはずのない内湾が見えていた。マグロ延縄船が船尾を前に流されていくのも見えた。上から見て明らかに、自宅も流されるだろうと分かった。自宅で飼っていたペットの事が気がかりでならなかった。

家屋が破壊され、流されていく様子を見て、鉄骨のビルがこんなにもろいものだと思い知らされた。破壊された町の中に佇み、冷静さや客観性はもちろんなかった。自宅があった場所をめちやくちやに壊滅していく津波を眺める以外、何もできなかった。余震による揺れは続き、ふと気がつけば水が上がってくる。鍵を付けっ放しの車から警告音とクラクションの音が鳴り響き、気仙沼市内の上空を飛び回る救助ヘリの音も聞こえる。そんな光景を見ながら、自宅とペットはどうなっているのかを考えるだけだった。

13日、ペットの安否確認をしに命懸けで自宅に向かった。たどり着くと家があったはずの場所は、根こそぎ、何も無かった。人生で初めて膝から崩れ落ちて号泣した。人間って本当に崩れ落ちるように泣くのだと思った。「何もない」。自分が20年間作りあげた作品もない。可愛がっていたペットのウサギも助からなかったことがはっきりと分かった。愕然とした。大震災発生から2日後、大きな余震や津波も収まらない状況だ。このままこ



こに居ては自分も妻も命が危ないと思い、妻を守りたい一心で、何もできないまま避難所に戻ることにした。

倒壊家屋の中から、助けを求める声が聞こえた。辺りを見渡すと3階建てのビルの3階で男性が手ぬぐいを振りまわして、助けを求めている。倒壊した建物の中は、階段がまるで滑り台のように泥に覆われ、3階へ上ると中には身動きの取れない老人と、建物が流される途中にこの3階建てのビルに飛び移った人など、面識のない計4名が助けを待っていた。

その後、救助を求める人たちがいる所まで自衛隊員を案内し、救助することができた。

写真による被災記録活動

震災から3日後に自宅へ行った時、妻が携帯電話で写真を撮っていた。最初はどうして撮るのか理



撮影：2011.5.11 気仙沼市川口町（山内宏泰さん撮影）

解できなかった。こんな写真を撮ろうという気分にはならなかった。妻は、両親や親類に状況を伝えるために撮っていたのだ。それを聞いて職場の同僚にもこの状況を教えるために、写真を撮って記録を残そうと自分も思った。美術館の学芸員も、外へ出かける者は必ず各々が行った先々で被害状況を記録に残すことにした。

3月16日、被害の大きかった鹿折地区まで歩いて行ってみた。1日歩いて状況を把握しながら、写真記録を残しておかなければならないと本気で考えた。

学芸員の中で話し合いを行なった。我々にしかできないことで、我々がやらなければならない事は何だろうか。震災発生に伴い、美術館職員は避難所となっていた防災センターでの被災者対応、救援物資保管庫となった館の施設管理、空調機械等が機能しなくなった状況での美術館資料管理などを行っていた。開館以来、美術芸術文化の普及と並行して地域の生活文化を調査、研究、蓄積してきた博物館として、さらに2006年来、地域の津波災害について調査研究、普及活動等を行ってきた学術専門機関、教育施設として、美術館が優先すべき使命は「被災した地域文化の再生に寄与することと、今回の震災被害を後世に伝えていくこと」ではないかとの見解を広域組合管理者、広域組合教育委員会から示され、当館学芸員は3月23日より写真記録を継続して行なうこととした。

当時、誰もそのような任務を行なう人間はいなかった。思い出と記憶を写真に残そう。震災前のそこで暮らした生活の痕跡を1枚でも多く残そうと思った。それは被災者のためだ。気仙沼の最後の姿を残すことが最大の使命だった。破壊された町、被害を伝えるという意味も大きい、もっと大事だったのは壊れる前の町を残すことだった。その写真を見直した時に、我々が「語る」ことが必要であると思う。みんなが楽しい暮らしをしていたという事が伝わらないと、私たちが何を失い、何を破壊されたのかを伝えることはできない。我々は「瓦礫」という言葉は使わない。「被災物」「被災資料」と呼んでいる。

震災を振り返って

我々がこの場所で安全に暮らしていく権利を持っているとすれば、自然の脅威から安全を守っていく責任を持っていなければならないが、それが分離してしまっている。これは我々、被災者の責任でもある。この町を安全な町にする。そうしなければ、自分の子孫たちが安全に生きていけない。あの日を境に世界は変わっていくと思っていた。でも、それは違った。元に戻そうとしている。

東日本大震災の記録、記憶を正しく伝承、活用するために、私たちは何をすべきだろう。これは、この大震災に遭遇した全ての人々が、未来のために今、考えなければならないことだと思っている。「津波常襲地帯」であるこの地域で、今後、美術館が果たすべき役割や被災社会の一員としての役割、そして未来を築いていかなければならない同時代に生きる人々の役割を、恒久的に考える機会を提供していきたいと考えている。子どもたちが成人した時に、「興味ない」と言われられないためにも、「未来の町を守る大人」を育てるための教育にすぐにでも取り組まなければいけないと思っている。

撮影した写真は30,000点に近づこうとしている。その1枚1枚に、シャッターを切った理由がある。その理由を語ることで写真はただの記録ではなく、記憶を伝えるスイッチとなる。写真として残された画像は確かに重要だが、もっと大切なことは「その時、人は何を感じ、何を思い、何を考えたのか」だと思っている。現場で被災資料を収集していると、そこに暮らしていた人の生活が見えてくる。大事なものがこんなにも破壊されたことを後世に伝えていかなければならない。



撮影：2011.10.27 気仙沼市仲町（山内宏泰さん撮影）



撮影：2011.6.1 気仙沼市唐桑町只越（山内宏泰さん撮影）